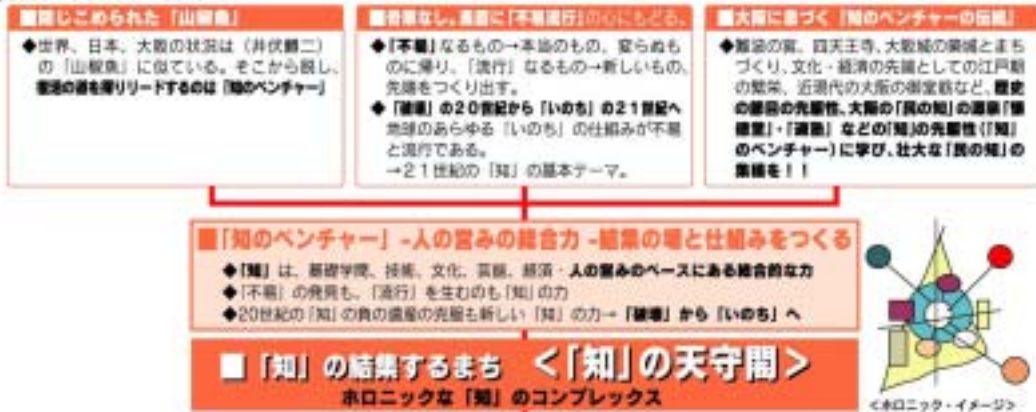
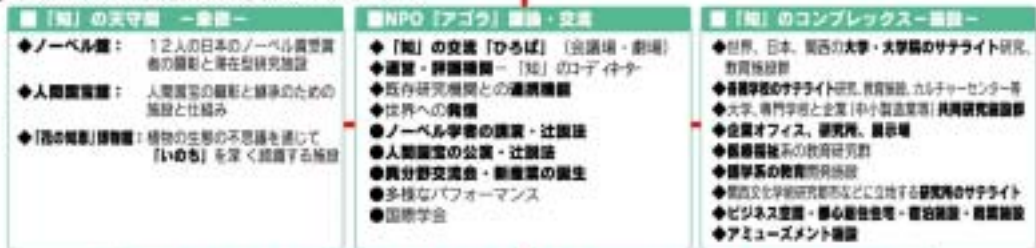


(1) まちづくりのコンセプト

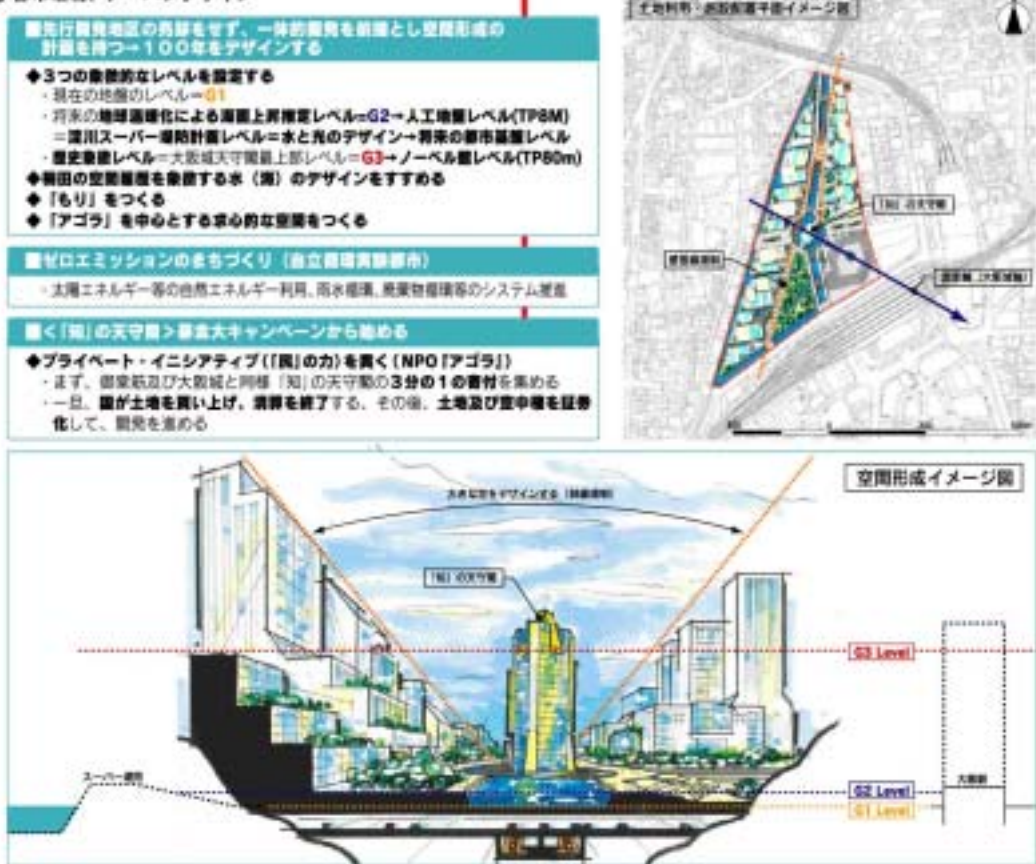


(2) のぞましい土地利用、立地を回るべき施設・機能



■ 新しい「民の力」が生まれ、21世紀「大阪」が芽生える

(3) 都市環境、アーバンデザイン



(1)まちづくりのコンセプト

閉じこめられた「山椒魚」 - 現状の閉塞感をつよく認識する -

世界、日本、大阪の状況は（井伏鱒二）の「山椒魚」に似ている。自分の気がつかない間に肥満し、自らの「すみか」である岩の洞窟から出られなくなって、「何たる失策であることか」とつぶやくしかなかった「山椒魚」である。まぎれ込んできた蛙と一緒に巻き添えとして、双方がため息をつきあっているという場面でこの短編は終わっている。われわれ日本のみならず、世界がさまざまな様相を呈しながら、閉塞され、そこからの脱出策を模索している。われわれのグループの時代認識は、そのことから出発した。そして、そこから脱し、復活の道を探り、そして未来へとリードするのは、人間が20世紀の間に培ってきた「知」の力を改めて信じるしかないのではないのか。「山椒魚」は、しばしば、体ごとぶつかることを試みて出口にコルクの栓のようにつまってしまっていて身動きがとれなくなった。悲しいかな彼らには「知」の力が備わっていなかったただだ。われわれ人間は幸い膨大な「知」の財産を持つことができている。この状況から脱出するにはこの「知」の力、しかも鋭い「知のベンチャー」を結集する以外に手はないのではないのか。こんな思いが、このコンセプトの底辺に横たわっている。

しかし、短絡的で即効的な奇策はない。奇策は「弄する」という。弄するという語感には、「もてあそぶ」という感じがつかまとう。今の日本にも世界にも「ずっと」素直には理解しがたいような策が、様々なレベルで弄せられているのではないだろうか。日本だけを見ても、政治も行政も、民間の企業も身もだえしながら。われわれを素直に説得するにはほど遠い策を弄している。もう少し「素直に」なれないだろうか。毎日新聞は、今年（2003年）の元日の社説で、小難しい不良債権問題などをくどくど説くのではなく、「お金のない今は、道路を造るのを少しやめよう。出来るようになったら、つくるようにしたらよいのではないか」こんな風に筋をしっかりと捕まえて素直に考えてみようよと訴えていた。

そんなことを考えているうちに、「不易流行」という言葉にぶつかった。「不易流行」という言葉は、「不易」なるもの 本当のもの、変らぬものに帰り、「流行」なるもの 新しいもの、先端をつくり出す。そんな感じの中味を持っている。今の様々な施策は、「不易」なるものを、どこかに置き忘れて、「流行なるもの」、しかも目先のことのみにとらわれているという感がしてならない。毎日新聞ではないが、心から素直になって、「不易流行」の心に立ち帰ることが、今は何よりも必要と考える。

注：「不易流行」 「不易を知らざれば、基（もと）立ちがたく、流行を弁（わかま）えざれば、風あらたならず。その基はひとつなり。」 「去来抄」（永遠不変のものを知らなければ基礎がつかれないし、流行をわかまえないと新鮮さを持ち得ない。大阪は、芭蕉の終焉の地でもある。）

「破壊」の20世紀から「いのち」の21世紀へ

今の時代にとって、「不易流行」とは何か。われわれは、20世紀には戦争をやった、沢山の戦争の後には、環境破壊を、つまり人と地球を、いわば「人知」を尽くして破壊してきた。破壊の中には、人以外の生き物の「いのち」が当然含まれていた。そういう「いのち」をつつみこみ育む地球の精妙な仕組みそのものまで破壊してきたのではないのか。地球温暖化という事態を引き起こしてしまった。いわば、「人知」が作り出してきた「負の遺産」の極まったものなのかも知れない。このような意味から、21世紀に臨むわれわれの「知」の基本テーマは、地球のあらゆる「いのち」の仕組みのもつ「不易」なるものの解明、理解をすすめることと、ここから生まれてくる克服の方策が「知のベンチャー」としての「流行」でなければ、ならないだろうと思う。人のあらゆる営みのフェーズにおいて、「知」のベンチャーのベクトルは、地球の「いのち」の方向に向いていなければならないと考えている。

大阪に息づく『知のベンチャーの伝統』

ひるがえって、大阪に話をもどし、その歴史を少し緋くと、大阪には脈々たる「知」の伝統が息づいていることに、改めて驚かされる。

難波の宮、四天王寺、大阪城の築城とまちづくり、文化・経済の先端としての江戸期の繁栄、近現代の大阪の御堂筋など、歴史の節目に展開された先駆性を知ることができる。しかもその伝統の中には、中央から一線を画した大阪の「民（たみ）の知」が源泉となっているといってもよいであろう。とりわけ、「民（たみ）」が主導してできあがった「懐徳堂」・「適塾」などに代表される「民の知」の先駆性（「知」のベンチャー）に着目すべきではなからうか。ここから輩出した人材や成果を学ぶとき、われわれが改めてもつべき勇気を喚起される思いが湧いてくるのである。さらに大阪は、学問だけではなく、芸能や文化、商取引（経済）の領域などにおいても、重層的な厚みのある伝統をもっていることを忘れてはならないだろう。隣接の「堺」を通じての海外交易や文化文物の交流にも支えられて来たことも重要な事実である。

このような大阪の伝統に「不易なる心」を見だし、学び、21世紀の真に新しい「流行」をつくりだすことが、極めて重要になってきたといえるのではなからうか。そのために、この交通至便な地域に壮大な「民の知」を新たに結集させようではないか、これがわれわれの基本コンセプトである。

「知のベンチャー」-人の営みの総合力 - 結集の場と仕組みをつくる -

われわれは、ここまで断りや定義をしないで「知」という言葉を使ってきた。以下では、こんな意味で使いたいと思う。

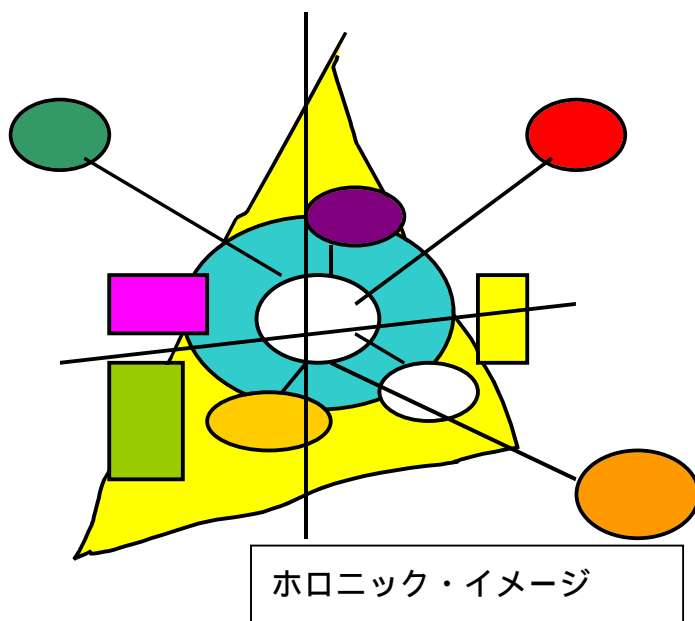
それは、「知」は、基礎学問、技術、文化、教育、芸能、遊び、生産・経済・商活動、生活のあり方（ライフスタイル・青老病死の問題）といった「人の営みのベース」にある総合的な力＝「知恵」を「知」と呼ぶことにしよう。庶民のバイタリティーを支える「知」といっておくのがよいかも知れない。

そういうあらゆる「知」が結集し、交流し、21世紀に向けて発信するまちにしよう。その仕組みを提案しよう。

そんな思いを込めて、以下のコンセプトフレーズを提案する。

「知」の結集するまち < 「知」の天守閣 >

ホロニクな「知」のコンプレックス



(2) のぞましい土地利用、立地を図るべき施設・機能

このまちは、「知」の象徴、「知」の議論・交流、「知」のコンプレックスの3つの機能を備える。

「知」の天守閣 - 象徴 -

「知」の天守閣と名付ける象徴的な建築をつくる。その内容は、3つの機能から成る。

ノーベル館：12人の日本のノーベル賞受賞者の顕彰と滞在型研究施設

世界に向かって日本の「知」の高度な象徴であるノーベル賞受賞者は、現在(2003/01)12人にのぼる。この方々の栄誉を顕彰し、その方々が気楽に訪れ、滞在型の研究の場を提供するとともに、「知」の発展のために講義(後にいう「辻説法」)をしていただく、「知」の発展の先導・刺激役をお願いしたいと考える。研究室、宿泊施設等を設置し提供する。

「知」の天守閣にふさわしく、大阪城の天守閣の頂部の標高(約84メートル)に設置する。

人間国宝館：人間国宝の顕彰と継承のための施設と仕組み

日本の文化、芸能を支えてきた人々の業績をたたえ、披露してもらおう場を提供する。業績展示・小劇場設備などをそなえ、随時、その技芸、技能の披露・伝承の場と仕組みをつくりたい。また、各種のマイスター制度による人々の参加も望まれる。

「花の知恵」博物館：植物の生態の不思議を通じて「いのち」を深く認識する施設

われわれは、コンセプト提案の中で、「知」のベンチャーのベクトルの向かう方向は、地球の「いのち」の方向であると述べた。

この考え方を、花が自分の種の保全のために、昆虫との関わりや、自然の空気の動き(風)等を驚くべき精妙さ、巧妙さで仕組みをつくっている。日常的には、われわれの目には触れたりはしないが、「いのち」の輪廻を見事に体現したものである。こうした事例などを興味深く展示しながら、よりひろい地球という生態系の「いのち」にアプローチし、地球環境の本質的な問題を、みんなで学び、遊ぶ「博物館」を提案する。このまちへ集まってくる個々の多様な「知」の集合体、学校、企業などの事業の方向性と関連しあう関係が生まれ、より面白くなることを期待したい。

『アゴラ』 - 議論 - 交流の場と仕組み -

アゴラ [(ギリシア) agora]とは、古代ギリシアにおいて、国の中核としての重要な役割を果たしていた。このまちのコンセプトでも、「知」の天守閣及びまちの中核的役割を「アゴラ」を与えたいと思う。

その役割は、端的にいえば、このまちに集まってくる「知」のコンプレックスの各々が発するものを集め、結びつけ、情報（新製品）発信して行く役割だと考える。交流の場づくり、連携などコーディネートの機能を果たす機能である。このまちの「知」に関する仕組みの立案や運営を司るものでもある。できれば、先にも述べるが「民」が主導するプライベート・イニシアティブの「NPO」が主体的に出来上がることがふさわしいと考えている。したがって、この「知」の天守閣の下層部分に配置し、アクセスが容易であることが望ましい。

「機能」

「知」の交流「ひろば」（会議場・劇場）

既存研究機関との**連携機能**

世界への**発信**

運営・評議機関 - 「知」のコーディネータ

ここでの主な活動内容を例示しておこう。以下の方々が、レベルの高い話を平易に市民や子どもに語りかける、いわば「辻説法」とでもいうべき講演、公演など、また様々な技をもったマイスターの技能披露伝授などが考えられる。また、異業種の交流を進める交流会の開催から新産業への誘導なども考えられる。当然、多様な国際学会なども視野に入るであろう。

さらに、自由なオープンスペースとしての意味合いももたせ、大道芸の拠点であるという使い方も、このまちの活性のためには有効であろう。

「活動内容」

ノーベル学者の講演・辻説法

人間国宝の公演・辻説法

異分野交流会・新産業の誕生

多様なパフォーマンス

国際学会

注：古代ギリシアの都市国家（ポリス）の公共広場。政庁・神殿・商店などに囲まれ、集会や裁判などが行われた。（大辞林）

古代ギリシアの都市の広場。都市の生活の中核で、政治、経済、文化の中心。（広辞苑）

「知」のコンプレックス - 施設 -

上に述べた2つの機能すなわち＜象徴としての「知」の天守閣＞と＜アゴラの中核的連携交流機能をになうアゴラ＞は、いわば「この指 たかれの」指に相当する。

日本でも有数のアクセシビリティをもつ、この地に、先に述べた「人の営みを支える力」で

ある「知」を、高め、深め、広め、つながり、何かを産み出す志をもつ人々よ「この指にたかろうよ」という発想である。

近来、大阪市内の大学は、工場等制限法などの影響もあって、その多くが市外へ転出した。その一部の機能を都心に復活させる意味もあって多くの大学のサテライトが都心に輩出しつつある。これらが、今われわれが構想しようとしている「このまち」に集中的に高等な大学院のみならず学部レベルも含めて多くのサテライトが立地し交流がはじまると、日本の「知」が世界に刺激を与える新しい核的な存在になるかもしれない。多く市民や学生たちが集まることによって、まちも雰囲気も変わるかもしれないと思う。

関西文化学術研究都市など近畿圏に分散立地してきた研究施設群のサテライト研究施設が一部出てきてほしい。

また、大阪には、デザインや医療福祉などの実業・実技を教える各種学校の数も非常に多いという特徴もある。それらも、来て欲しいとおもう。より広がりをもった語学教育の場も欲しい。

高齢者、生涯教育の大きな柱の一つとして盛んなカルチャーセンターも、多様に立地させたい。

さらには、企業の研究所も歓迎だ。その研究的展示も歓迎だ。もちろん、オフィスも拒むことはない。「このまち」から新しいものが生まれ新しい商売が生まれて欲しいからだ。

そして、集まる人々の「遊び」を支えるアミューズメント施設、商業施設もコンプレックスとなればよいと考えている。研究者などの宿舎としての住宅も一部用意すべきであろう。

これらの「この指にたかった」多様な機能は、それぞれが特有の機能、組織をもった自立的なものであるが、「たかった指」である「知」の天守閣、アゴラとの連携によってますます洗練され研ぎ澄まされた「知」の生産が進むことになるだろうと夢見ている。こういう自立した「ホロン」が自在に連携ネットワークする構造を「ホロニックなネットワーク」とよび、コンセプトを示した枠の添え書きにした。こんな自在で闊達な「まち」を夢見よう。

世界、日本、関西の**大学・大学院のサテライト研究、教育施設群**

各種学校のサテライト研究、教育施設、カルチャーセンター等

大学、専門学校と企業（中小製造業等）**共同研究施設群**

企業オフィス、研究所、展示場

医療福祉系の教育研究群 **語学系の教育開発施設**

関西文化学術研究都市などに立地する**研究所のサテライト**

ビジネス空間・都心居住住宅・宿泊施設・商業施設 **アミューズメント施設**

新しい「民の力」が生まれ、21世紀「大阪」が芽生える

(3) 都市環境、アーバンデザイン

先行開発地区の売却をせず、一体的開発を前提とした空間形成の計画を持つ

100年をデザインする

このコンペの前提条件となっている先行開発の地区の年内売却を容認することはできない。なぜなら、旧国鉄管理局跡地のような切り売りの結果が、量販店の立地を招き、この土地の利用の方向性に著しい影響を与えたことは、周知の通りである。その量販店そのものを批判するものではないが、当該用地のもっとも要になりそうな一番大切な隅の土地利用が、このように既成事実で決定されてしまう弊害は大きなものだ、われわれは考えた。年内売却予定とされている部分も、全体用地から見れば、利用度が高いと通常考える場所と考えられる。量販店の先行立地が全体に及ぼしたと同じ轍を二度と踏んではならないと思う。このような考察から、われわれの提案は、先行開発地区の売却は行わず、用地全体の一体的開発を前提として空間形成等の考え方を展開することにした。

次に、少なくとも100年という時間の長さを展望しながら、開発をすすめる、つまり「100年をデザインする」というテーマを提示したいと考えた。そのため、空間形成の基準となる基盤レベルと、景観形成の枠組みとなる壁面線・斜線規制を機軸とした地区計画の実施を提案することにした。いわば、空間利用、景観形成の約束事（憲法のようなもの）を示し、それに向けて100年のタームで「民の知の力」を継続的に集積していく方法を示したいと考えた。また、本地区が、昔は「海」であったという空間の履歴を象徴的に示すとともに、「いのち」の源である「水」のデザイン、緑の「もり」の形成を重要な要素として位置づけることにした。

3つの象徴的なレベルを設定する

現在の地盤のレベル = **G1**

将来の地球温暖化による海面上昇推定レベル = **G2** 人工地盤レベル (TP8m)

= 淀川スーパー堤防計画レベル = 水と光のデザイン 将来の都市基盤レベル

いま、地球環境問題の最大の課題は、温暖化の問題である。それによって、海面の上昇も取りざたされ、100年タームの計画を考えるとすれば、いま、正確な予測は不可能であるにせよ、その警告を含めての対応策を提示しておくことが重要であるとわれわれは考える。

あわせて、国土交通省が提示している淀川のスーパー堤防によるまちづくりの考え方への対応、現大阪駅のホームレベル等を勘案してこの G2 レベル（約 0P8m）をこのまちの基盤面として人工地盤化することを提案する。さらに、このレベルは、淀川スーパー堤防計画に連動して周辺地域の開発整備につながっていくなど、大阪の100年後の都市基盤レベルにつながって行くことを示唆するものでもありとわれわれは考えている。

歴史象徴レベル=大阪城天守閣最上部レベル=**G3** ノーベル館レベル(TP80m)

大阪の歴史の「証(あかし)」でもある大阪城、そして、民の力がつくった象徴でもある大阪城を象徴的に認識し、提示し、かつ親しみをこめて、ハイレベルの「知」の象徴としてのノーベル館の設置レベルを大阪城の再頂部のレベルと合致させることにした。また、このまちを構成する何かの基準軸を大阪城方向に象徴的に設定することも考えたい。

梅田の空間履歴を象徴する水(海)のデザインをすすめる

大阪は、古代、上町台地以外の地は、「海」であった。この地も「海」から陸地への長い歴史を経て形成された。また、「海」(水)は万物の「いのち」の源である。そんな意味から、この空間形成の主要な要素の一つとして、このまちに回遊する巨大な水面を想定した。淀川からの水を何らかの方法で利用したい。また、この水面は、可能な限り静水面で、まわりの風景や、天空の変幻を写し取るものでありたいと思っている。「知」の天守閣は中央の大水面の中央に水に浮くように屹立する。

「もり」をつくる

もう一つの「いのち」の象徴「もり」をつくる。さほど大きくはないが、3~4ヘクタールぐらいの「もり」を100年かけてつくる。市民参加の「もり」にしたい。

「アゴラ」を中心とする求心的な空間をつくり、大きな「空」をデザインする。

・この土地の平面形状の三角形の特徴を活かした**壁面線と斜線規制を含む地区計画**をつくる。
イメージ平面、断面パースに示している。

ゼロエミッションのまちづくり(自立循環実験都市)

・太陽エネルギー等の自然エネルギー利用、雨水循環、廃棄物循環等のシステム推進することを提案する。

(4) 事業化等について

プライベート・イニシアティブ(「民」の力)を貫く。

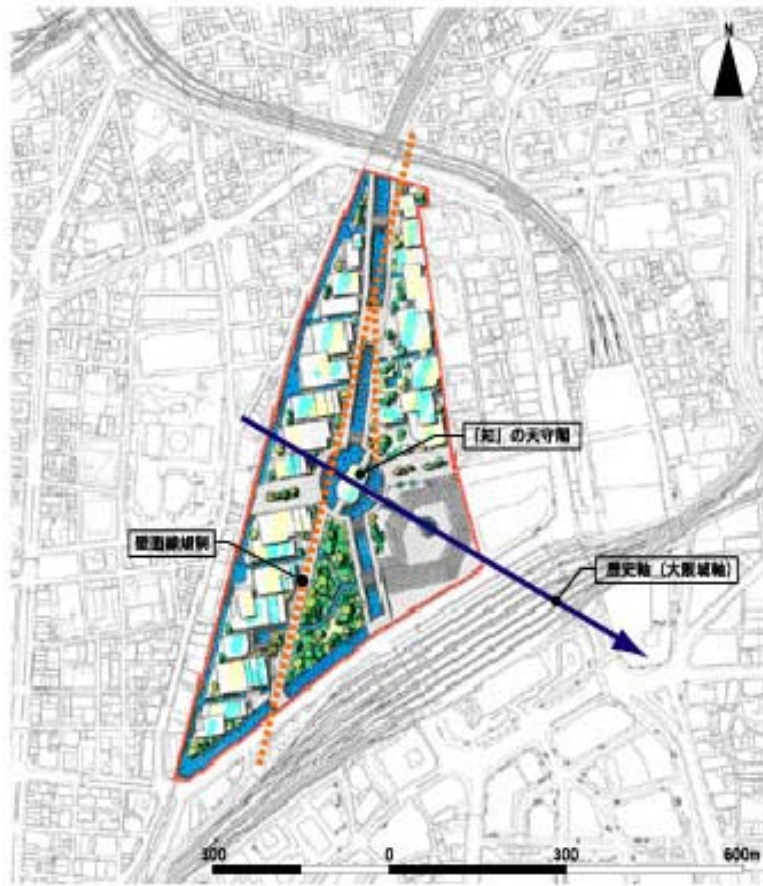
われわれの先輩達大阪市民は、民の力で大阪城をつくった。徹底した市民参加の機会を全面に打ち出して進めて行くべきであると、われわれは心から思う。そのため、

<「知」の天守閣>募金大キャンペーンから始めようではないか。手始めに NPO『アゴラ』を立ち上げようではないか。「この手にたかれ」の立地施設、企業へのキャンペーンも、この NPO が進めたらよいと思う。

まず、「知」の天守閣の**3分の1の寄付**を集める

一旦、**国が土地を買い上げ、清算を終了する**、その後、**土地及び空中権を証券化して、開発を進める**

土地利用・施設配置平面イメージ図



空間形成イメージ図

